



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

猿橋

山梨県大月市猿橋町

なぜ「猿」の橋なのか。刎橋はねばしという構造の猿橋が架けられたのは、諸説あるが七世紀初頭とされる。志羅呼しらかという百濟くだらからの渡来人が、民衆の懇願を受けて架橋を試みるが、谷は急峻で流れも速い桂川かつらがわに橋を架けることは容易ではない。思案していると川の兩岸に猿の群れが現れ、手を差し延べ合いながら「橋」をつくり次々と渡河していった。志羅呼はこれにヒントを得て、橋脚を施さず、刎木はねぎという木材を岩盤に挿入し、その上に更に別の刎木を重ね、先へと突き出すことを繰り返して橋桁を載せたという。

猿橋では刎木を二列四層に重ねてある。間には枕梁まくらばりという部材が刎木と直交しており、腐食防止のための屋根が設けられている。いくつもの小屋根が橋を飾る様は神社建築を想起させ、唯一無二の優美かつ不思議な景観を構成している。周囲の紅葉と調和したこの猿橋が、※日本三奇橋の一つに数えられることも納得だ。

この橋があるのは山梨県大月市。現在の猿橋は一九八四（昭和五十九）年に架け替えられたものだ。国の名勝にも指定された奇橋の姿を継承するために、江戸期の出来形帳を参考に復元された。刎木は日鋼に木材を貼り付けた部材を使用し、鉄骨造木装となっている。長さは三〇・九㍎、幅三・三㍎、川面からの高さは三〇㍎を超す。この高さを猿が手をつなぎ、体を支え合って渡ったのかと想像すると微笑ましく、そして逞しい気分になってくる。

志羅呼は別名を路子工みちのこたくみと称する。造園技術に長けた土木技術者であったという説がある。七世紀初頭、日本に帰化した後、各地で造園や橋梁建設に携わった。野猿に教えられる前に、生誕地の百濟で既に刎橋の構造に開眼していたのかもしれない。同様の橋はインド、ネパールなどその原型が今も残されている。

